

かつての河北潟、多様性の高い豊かな水域

- 干拓以前の水域環境 -

かつての河北潟の水域環境に関する資料は決して多くないのですが、古い地図や文献、聞き取りなどからは、多様な水域を有する水郷地帯であったことがうかがえます。

フゴ

成立当時の河北潟は広大な面積を持っていましたが、堆積によりだんだんと小さくなっていきました。しかし比較的深いところは陸化せずに、孤立した窪地として残されました。この窪地が沼となりフゴ（不湖）と呼ばれていました。フゴは泥が深く人には利用しにくい環境であったようですが、徐々に開田されていきました。大正時代に編纂された石川県河北郡誌には内高松のフゴについての記述として「前田利常の時、今の太田川の河床に堀切を作りて其水を排出し、以て約15町歩の水田を作り」と記されています。またフゴを干拓した場所では「全水量を落下せしめし、尚沼澤の痕跡を存し蘆葦の生ずるに放任せしが（中略）而も尚年々新しき土壌を加うるに非れば耕作に適せざる部分ありといえり」と書かれています。

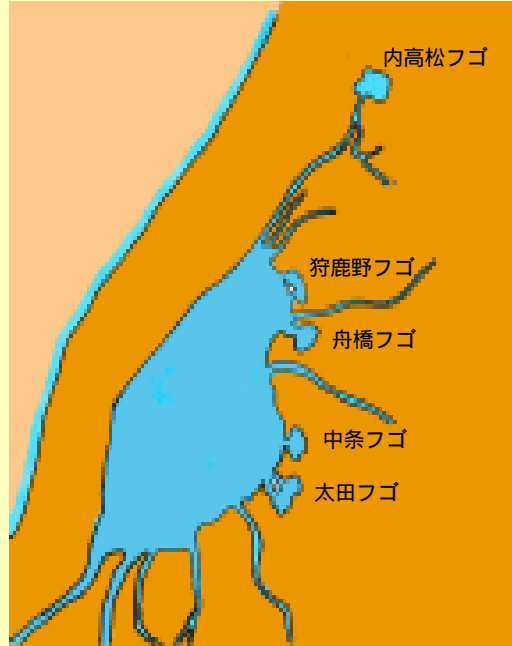
人にとっては開発が困難な場所であったことは、フゴに棲む動物にとっては逆に棲みやすい生息環境であったことが想像されます。

複雑な河口域

河口に堆積した泥湿地の上にはヨシが繁茂し、延々と続く高茎の草原が存在していました。河口部は流路が枝分かれして、複雑な湖岸が形成されていました。こうした環境は野鳥の隠れ場として、また繁殖場所として利用されていたと考えられます。鬱蒼とした抽水植物帯は一度入り込んだらなかなか出ることができず、人間からみれば、まさに魑魅魍魎の住む世界であったようです。



昭和35年頃の森下川河口域。河口の中洲が発達し、水路（舟入川）が農地の中を縦横に走っている。（（財）日本地図センター（1997）より改変）



1826年（文政9年）の加州河北郡図より作成

水路

潟縁にはもともと道はなく、移動は舟でおこなっていました。周辺の集落では家と家、家と田を結ぶイタニと呼ばれる小舟の通る水路（舟入川）が縦横に走っていました。そのため内陸部にまで水路による水域ネットワークが構成されていました。ある水路では、現在では河北潟から姿を消してしまったオニバスが繁茂し、舟の通行の邪魔にさえなっていたといえます。水路は、多様な水生植物が繁茂し、メダカや水生昆虫の恰好の棲み場所であったことが推測されます。



海水～淡水までの濃度差を伴う漏水

潟の水は海水と淡水の混じる汽水でしたが、その濃度は場所により異なり、海水に近い場所からほとんど淡水の場所までがありました。塩分の濃い場所では海水魚が往来し、海から離れた北端では淡水魚が獲れました。それぞれの濃度には異なる生物が生息し、多様性の高い生物相が存在していたことが考えられます。

水生植物が繁茂する水辺

潟の水辺は水生植物が繁茂していたようです。舟で潟に出るときに誤って水草の茂っているところに入るとクロモなどの沈水植物や、ヒシ、アサザなどの浮葉植物が櫓にからみつき、前にも後にも進むことができず苦勞したそうです。

かつて河北潟は「蓮湖」と呼ばれていました。石川県河北郡誌には「蓮湖の名は古来蛇蓮と称し、黄色の花を著くる蓮を生ずるが故に名くという」と書かれています。「蛇蓮」とはオニバスのことで、かつては潟を代表する水草であったことが考えられます。また、蛇蓮が黄色の花をつけると書いてありますが、実際にはオニバスは赤紫色の花をつけます。河北潟には黄色い花をつけるアサザやコウホネがたくさん自生していて、これをオニバスの花と勘違いしたのかもしれませんが。

干拓後に生まれた新しい環境

干拓によりヨシを中心とする広大な草原が出現しました。日本においては低地は、人為による開発が進んでいる場所であり、大きな草原はほとんどありません。干拓地に形成された広大な低地湿性草原は、かつての失われた環境が復元された貴重な場所となりました。こうした環境を求めて、たくさんの生物が進入してきました。こうして河北潟の野生生物群集に新しいメンバーが加わりました。その代表は猛禽類のチュウヒです。干陸後しばらくの間、河北潟はこのチュウヒを初め、ケアシノスリ、マダラチュウヒなどの珍鳥も訪れる、日本有数の野鳥の宝庫でした。

湿田

だんだんと河北潟は堆積が進み小さくなっていきました。堆積したあとを開拓したり小規模の干拓を繰り返して水田を広げていきましたが、もともと低い土地であるため、潟近くのほとんどの田は大雨が降ると冠水する湿田でした。また、舟で稲刈りをするために櫓の歯状に溝を切り込んだ「畝田^{うねだ}」もみられました。これらの湿田での収穫はあまり良くなかったようですが、渡り途中のシギ・チドリ類にとっては、恰好の採餌環境であったと考えられます。

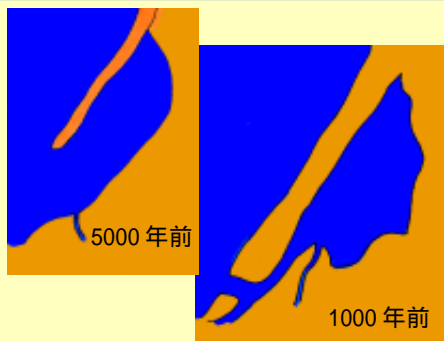
地点	塩素イオン濃度 (Cl-mg/l)
向粟崎	650
大根布 A	560
大根布 B	360
大崎	270

1958年の河北潟の塩分濃度に関するデータ（金網 1973より）



自然の中で営まれていた人々の生活

—河北潟と人々の暮らし—



古代 河北潟周辺は恵みの地

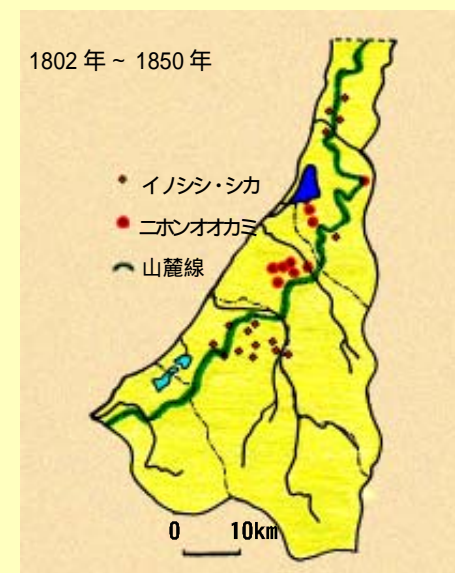
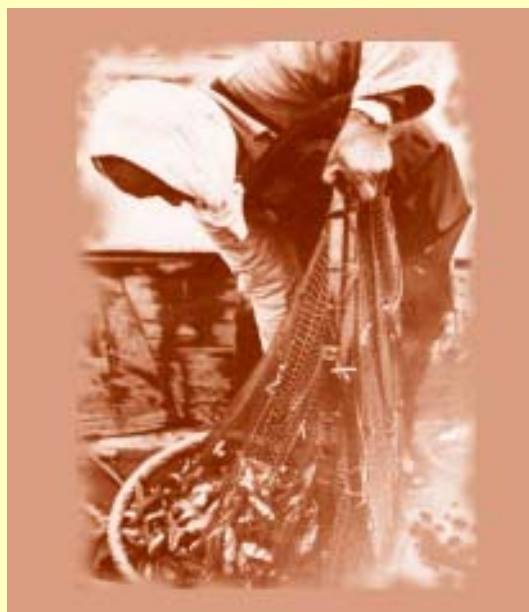
5000年前に内灘砂丘の伸長が進み、河北潟は海からしだいに切り離されつつありました。この頃、河北潟周辺に住む縄文人は潟や周辺の川から貝類を採集していました。宇ノ気町にある上山田貝塚の出土品がこのことを物語ります。

また、金沢市梅田町で見つかった弥生時代の水田跡や森本丘陵に点在する古墳群は、河北潟周辺の肥沃な地域が古くから人々に利用されてきたことを想像させます。

江戸時代 加賀藩の管理下

河北潟周辺を含む加賀平野全般は藩主の鷹狩りの地となっており、領民が野生動物を獲ることは固く禁じられていました。この政策のおかげでしょうか、河北潟周辺ではシカ、イノシシ、ニホンオオカミなどが目撃されており、大型ほ乳類は多く生息していたようです。また、河川や湖沼には「御止場」と呼ばれる魚類の繁殖保護地が設けられました。河北潟においては、各村ごとに使用できる漁具漁法が定められていました。

領民にとってはさまざまな制約を受けるものでしたが、そのことによって資源としての野生生物が守られていたと考えることもできます。農業生産は自然の制約を受けていましたが、害虫防除などには、野生生物が積極的に利用されていたようです。



野獣害分布図（千葉徳爾 1995より改変）

明治～昭和初期

河北潟は、周辺で生活をする漁民の重要な漁場でした。漁業を行う場合には、漁業権の制約がかかりました。これによって漁具・漁法に地域的特色があり、向粟崎の袋網や大根布の狩曳網など潟ではさまざまな光景が見られました。河北潟ではフナなどの淡水魚に加えてスズキ、ボラ、サヨリ、シラウオ、ヤマトシジミなど汽水性の魚の漁獲もありました。女性たちはこの魚介類を金沢や、遠くは福光方面に振り売りに歩きました。

大野川を通じて数トンもの大きな舟が潟と海とを行き交っていました。海の魚介類が現在の向粟崎辺りまで運ばれ、周辺の人々は舟小屋から舟を出して買いに出かけました。網に引っかかって売り物にならないイワシは田んぼの肥料として使われていました。現在の内灘町など、生活の基盤を漁業に依存していた集落では、ほとんど農業を行わなかったようですが、花園や才田など東岸から南岸の集落では水田農業に力を入れていました。潟周辺の田んぼには水路が縦横に走り、舟は農作業にも欠かせないものでした。



河北潟の舟と舟小屋

河北潟で使われていた舟は平底の舟で、櫓や竿を使って操作しました。各家はヨシで屋根を葺いた独特の舟小屋をもって、そこに舟を入れていました。家によっては何艘もの舟をもって、漁のときや稲を運ぶときだけでなく、日常の移動手段として使われていました。舟小屋は河北潟の湖岸に独自の風景をつくっていました。舟小屋の名残は現在でも、大根布や宮坂の県道8号沿いの車庫にみることができます。



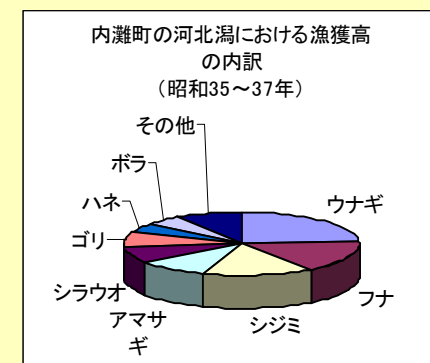
河北潟と子どもたち

河北潟の周辺の集落の子どもたちにとっては河北潟が遊び場でした。5～6年生にもなると各家から舟を持ち出して潟に集まり、子どもたちだけで潟の深いところまで漕いでいきました。夏休みには、潟で泳いで遊びました。

男の子たちはフナ釣りを楽しみました。泥の中にあるフナを手づかみで獲ることもできるほど豊富でした。女の子たちは学校が終わると、夕食のおかずにするシジミ貝を潟に採りに行きました。深いヨシ原をかき分けていき、ヨシキリやバンなどの巣を見つけて、卵を採って茹でて食べたりしました。鳥もちを使って小鳥を獲ったりもしました。

河北潟の漁法と漁獲

河北潟では、「底袋網」という定置網漁や、「狩曳」という船曳網、カワギス刺網、多くの漁船で魚群を包囲する巻打などの投網漁が盛んでした。特殊な漁法としては、「根掛抄漬」と呼ばれる柴漬漁がありました。これは魚の習性を利用した漁で、あらかじめクリ、ナラ



内灘町史(1982)より



シジミ漁の様子

などの枝約300本を束ねたものを水中に沈めておき、それを隠れ家として集まってくる魚を一網打尽にするものです。河北潟では、海水魚から淡水魚までのさまざまな魚が獲れましたが、水揚げ高からみると、ウナギ、フナ、シジミが潟漁業の主要な対象であったようです。ウナギは一時期放流もされていました。